3. 術後2週から、定量的に負荷を増加してゆく運動治療を行ない、10~15週で一本杖歩行が可能となっている。

追 加 山口県立中央病院 弓削大四郎
Y 螺子を使用する場合には、一本は大転子頂点より、あと一本は、強斜位で Calcar femoral を通じて入れると2本で強固な固定が出来る。

発 言 福岡大学整形外科 松崎 昭夫
Y 螺子は全体にねじ山が切っているので引寄せはつよくない。引きつけは AO の Spongiosa-schraube を使うと骨折線をこえて入れると引きつけがよい、われわれは AO の Spongiosa-schraube を用いて早く

動かしている。但し免荷は長くさせなるべく長く杖を使うように指導している。

発 言 久留米大 宮城 成圭
Spongiosa-schraube を用いると骨折面の接着がよいと考えて一時使用したが、治療の過程で骨折面の吸収が起こり初めの圧迫力が失なわれるので、最近再び Spongiosa-schraube を用うことを止めた。

発 言 九州労災 天兒 民和
大腿骨頸部骨折の術式は Smith-Petersen, Küntscher 釘等一般化で多年の経験に堪えているものが安心である。他のいろいろの方法は特に自信のある人以外は注意して適応を決定して頂きたい。

特 発 性 大 腿 骨 頭 壊 死 1 経 過 例

東洋工業附属病院 整形外科

五 島 伸 幸・小 川 加弥太
新 谷 翼

A Case of Idiopathic Avascular Necrosis of Both Femoral Heads.

by

Nobuyuki Gotoh, Kayata Ogawa
and Tutoshi Shintani

From Dept. of Orthopedic Surgery, Toyokogyo Hosp.

The patient is a male of 52 year old and holds managerial position. He suddenly developed left leg pain and low back pain seven years ago, which were followed by similar pain on his right leg and visited this hospital one year later. On X-ray examination, his right femoral head showed an image of spotty sclerosis and his left femoral head showed a punched-out image of sclerosis and spurs in its inside. As time went by, his symptoms were aggravated, and deformities of femoral heads and bone sclerosis progressed. However, owing to conservative treatment, his clinical symptoms have been alleviated and he walks quite normally now, but with a moderate limitation on internal rotation of hip joints. On X-ray, deformities of both femoral heads are moderate, but bone sclerosis appears to have become less conspicuous and to be remedied. It would be necessary to follow up this case for an extended period of time.

症例は52才の男子。事務管理職員。昭和40年8月
誘因なく左下肢座癱痛を生じその後腰痛および右下肢

痛を生じて昭和41年5月入院。線所見にて右側骨頭
に散在性の骨硬化を認め左側骨頭臼蓋縁部に著明な骨

透明像と骨硬化を認めた。関節裂隙には特に変化はなく白蓋縁は軽度の **Osteophyte** を認める程度であった。その後下肢痛や股関節痛が著明で保存的治療を継続してしているが43年10月より勤務に服し当初一本杖の使用を必要としたが昭和46年より正常歩行。現在正座や階段歩行および長時間歩行も可能である。尚レ線所見として右側では骨頭の辺縁は軽度の不正を認める。著明な透明像はなく全般的に骨硬化を認めるが多少は初期に比し稀薄である。特異的所見として骨頭内側に著明な骨棘を認める。左側に於てもほぼ同様で骨頭面の軽度の不正と硬化および著明な骨棘形成を認める。関節裂隙は正常である。本症に就いては長期観察が必要と考える。

発言 九大整形 杉岡 洋一

教室治療例（観血的治療例44関節と放置例）について成績をみると、放置例では症例の多くは骨頭の陥没変形が進行するが、中には修復像を呈して変形も軽度にとどまるものがある。治療に影響を与える因子として、壊死の範囲と程度、年齢、職業等の因子が関与して来るので、特に予後と組織像との対比が必要である。今回の調査では初期に円形の透明像を呈して来る症例が比較的良好な経過を示した。

観血的治療例の成績をみると、1) 骨頭に陥没変形を生じない内に治療を試みるべきで、変形を生じたも

のに骨移植術は効果なく骨頭を残すには荷重面の変更（骨切り術）を考えるべき2) 白蓋縁を越える壊死巣に対しては骨移植のみでは不十分で骨切り術を加える必要がある3) 白蓋縁にかかる壊死巣で外側が保存されている例には内反骨切り術が、外側まで広くおかされているものには前頭を頸部を軸として前方に回転される回転骨切り術が理論的によいと思う。その新術式とレ線像を紹介した。

発言 長崎労災病院 三原 和夫

過去2年、5例の特発性大腿骨頭壊死症例を経験している。

この中で **Cup** を用いた2例 40才、38才を供ランし壊死部を切除したのち大転子の形成術を行なった症例の成績が非常に良好であったので追加した。

追加発言 山口県立中央病院 弓削大四郎

Pedicle Bone-Grafting をやる場合 **muscle pedicle** から移植者に致る栄養動脈を **Anatomopathological** に解明することが大切であると考ええる。

解答 国立福岡中央病院 古賀 順一

症例が少ないので、決定的なことは云えないが、もう少し経過をみてみたい。

私は可成り有効な方法と思っている。